

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470700549		
法人名	社会福祉法人 太陽の里		
事業所名	グループホームまごころ		
所在地	三重県松阪市垣鼻町1638-52		
自己評価作成日	令和4年9月8日	評価結果市町提出日	令和4年10月27日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470700549-00&amp;ServiceCd=320">https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&amp;JigvosvoCd=2470700549-00&amp;ServiceCd=320</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和4年10月4日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症の入居者様が「普通」に生活できるように職員の連携力を高めるように常に意識し、情報共有を怠らないようにしている。

グループホームの醍醐味である個別支援による外出や外食をコロナ禍によって行えない為、職員で話し合い、喜んでいただけるようなホーム内で出来る行事を毎月考え、行っている。また、外食できない代わりに毎月1回出前の日を作り、食べたいものをテイクアウトして食べていただき、好評を得ている。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍は3年目を迎え利用者の行動範囲は益々制限され、家族との面会は今だガラス越しであり、馴染みの関係も中断を余儀なくされている。職員はウイルスを持ち込まぬよう常にピリピリしストレスを感じている。そんな中でも、利用者の喜ぶことは何かと話し合いを重ねイベントを開催している。昨秋の運動会では、みんなで飾りつけや道具などを手作りし、当日の玉入れ・綱引きなどは大いに盛り上がった。今も廊下に当日の熱気を感じさせる壁飾りが掛けられている。外食の代わりに毎月出前の日を設定、馴染みの食べ物をテイクアウトで楽しんでいる。利用者に寄り添い、生きる喜びを共有し生活のパートナーとして毎日を楽しいものにしていこうという理念を実践しようという職員の姿勢が伺われる。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝礼時に職員全員で理念を唱和し、ケアに迷った時は理念に基づいたケアを実践するように心掛けている。	介護の心得の基本となる5か条の事業所理念を毎朝唱和し、日々のケアに反映させている。何か迷いがあれば、理念に立ち返って議論を重ねケアの方針を決めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会行事(溝掃除・草刈り・夜間防犯パトロール等)に参加している。また、自治会の防災役員として当ホーム主催での自治会合同防災訓練を年二回行っている。	コロナ禍で以前のような自治会の行事もなく、地域との付き合いはできなかった。清掃活動やこの地区特有の夏休み夜間防犯パトロールには職員が参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センターと共に認知症サポーター養成講座を開催し、寸劇を通して受講者がより実感をもって理解できるように取り組んでいる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルス感染予防の為、開催できていない。	コロナ禍で運営推進会議は開催できなかったが、参加予定者には、文書で中止の知らせを送っている。	運営推進会議は、事業所について地域の理解を得ることのできる大切な機会である。コロナ禍収束後に開催を円滑にいくために、事業所の状況を書面で報告し、意見をもらうなどの取り組みを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	分からないことや相談したいことがあれば都度、市担当者に相談し助言を頂いたり、意見交換をしている。	コロナ禍であり、市との情報交換や相談は電話で済ませることが多いが、書類の提出などは直接出向き顔を合わせて協力関係を保っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年二回身体拘束についての勉強会を行い、知識を得ている。身体拘束委員会を行い、現状での身体拘束の必要性の有無等を話し合っている。	身体拘束廃止ヒヤリハット委員会は、毎月職員会議の中で開催している。職員研修は年に2回行い、振り返りのプリント提出は職員にとって内容を理解していないと難しい内容となっている。コロナ禍でもあり終日玄関の施錠をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修で学んだことを伝達し、職員で共有している。また、着替えや入浴時に身体の観察をし、異常がないか確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際に成年後見制度を利用している入居者もみえる為、制度についての説明を含め、学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約の際は、重要事項内容について説明を行い、疑問点や不安な点は無いが、一つ一つ確認を行いながら納得して頂けるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	いつでも家族様や入居者様の意見を聞き、できるだけ要望に沿うように、会議で検討し運営に反映している。	何かあれば直ぐに家族に電話で連絡・相談し、思いを聴いている。家族からも対応が早く安心して任せられるとの言葉が寄せられている。現在、家族との面会は玄関先でガラス越しで行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	いつでも職員の意見を聞き、すぐに反映するよう努めている。	毎年1回、理事長面談があり、職員は前もって面談シートに自分の思いや要望などを書き、それを基に話し合っている。日常的に管理者と職員は気軽に話ができて、職員からの要望には迅速に対処している。職員間のコミュニケーションは良好である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に1回必ず理事長面談があり、各職員の考えや思いを聞き出し、考課している。また管理者とは都度話ができるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人一人に必要な研修には積極的に参加するようにし、職員の成長を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	以前は活発に行っていたが、コロナ禍の為行えていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	実調で情報を集め、家族様や本人様の要望を傾聴し、安心できる声かけ等を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	実調や契約前から家族様の話をしっかりと聞き、様々な情報を把握するように努め、家族様の意向や要望を把握している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約前から家族様の話をしっかりと聞き、他のサービスの方が本人様に合っている様子がみられた際は助言をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員が利用者に教えて頂いたり相談することで、暮らしを共にする者同士としての関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人様について質問したり相談しながら家族様と共に本人様を支えられるように協力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の為、原則面会は禁止としているが、感染者数によっては玄関先での面会等にて対応している。	コロナ禍で、馴染みの人や場所との関係継続は困難になっている。病院受診の際に、ドライブを兼ねて馴染みの街並みや公園を回って車中から楽しむこともある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う人や面倒見のいい人が隣に来るような席を配慮しており、困っている人がいると職員を呼んで下さる人など利用者同士の支え合いもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所された方の家族が相談に来られる事もあり、関係を断ち切らないように心がけている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話等のコミュニケーションの中から把握に努めている。コミュニケーションが難しい方は、何が今一番必要なのかを職員で話し合い考えている。	約8割の利用者は会話ができるので、日常のコミュニケーションの中から思いを汲み取っている。発語がない利用者については、どうしたら身体や気持ちが楽になるかを職員同士で常に考えて支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人や家族からお話を伺い、情報収集している。また、今までの暮らしのアンケートを実施し把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の様子を把握し、生活記録や個人記録に記録し、担当者にアセスメントシートを作成してもらい、職員間で現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	特に状態に変化が無ければ、会議にて3ヶ月に一度モニタリングを行い、現状に即した介護計画を作成している。	身体など状態に関する家族への電話連絡は介護支援専門員がすることが多く、家族の思いを聴きプランに反映させている。3か月毎に全員のモニタリングを行い、長期は6か月の利用者の状態に即した介護計画にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を記録に残し、職員間で情報を共有しながら、実践やケアプランの見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時必要な事を見極めて、時には家族の協力を得ながら対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為、利用できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の希望される医療機関や受診体制を優先し、安心して適切な医療が受けられるように対応している。	入居時に家族に意向を聞くが、現在全ての利用者は協力医をかかりつけ医としている。看護師は職員として月半分勤務し、医師との連携はスムーズで24時間医療連携が可能となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気になることがあれば看護師に相談し、処置や受診等の指示を受けている。24時間のオンコール体制で、緊急時は夜間でも相談する事が出来る。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には付き添い、サマリー等で情報を共有することで安心して治療にあたって頂いている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	毎月のカンファレンスで、何かあればその都度話し合いを行なっている。終末期になれば、それに対応したプランに変更している。	入居時に指針を基に事業所でできることとできないことを伝え、実際に終末期を迎えた時に家族と協力医を交えて方針を決定し、要望があれば看取り支援を行っている。今年度1名の看取りを行った。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命講習やAEDの使用研修などを行い、対応できるようにしていたが、今年もコロナ禍で感染者数が増えている為行えていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回、日中・夜間を想定し行なっている。利用者様と一緒に、想定した避難訓練を行い、日頃の備えに対する意識を高めている。	事業所周辺は自然災害の危険は少ない立地ではあるが、年2回事業所主体で地域と合同の防災訓練を実施している。地元の成年部で結成された消防団の参加で大がかりな訓練である。備品はローリングストック方式で常に確保している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	1人1人に合わせた言葉使いや接し方をし、プライバシーを意識した対応を心掛けている。	トイレ・オムツ交換・着替え・入浴時など、利用者の羞恥心に十分配慮している。声掛けの仕方や呼称は本人の意向に沿って行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定が難しい方でも、二者選択で自己決定をして頂いたり、会話の中から希望を聞き出し実現できるように対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴等は順番に行っている為、職員の都合を優先させて頂いているが、それ以外の時間はお好きなこと(塗り絵やパズルなど)をして頂けるよう、その方にあった支援を行なっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的な整容以外でも、衣服が汚れればすぐ交換し、さっぱりと心地よく過ごして頂けるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者様の出来る範囲で、食事の盛り付けや後片付けを手伝ってもらっている。	専門の業者から届いた調理済みの料理を湯煎して、一人ひとりに合わせて刻んだりムースにしたり形態を変えて提供している。誕生日には本人の希望を聴いておやつを手作りして楽しんでいる。中でも、たこ焼き・鈴カステラ・どら焼きが好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の状態を把握し、生活記録に残すことで健康管理をしている。あまりにも摂取量が少ない時等は家族と相談しながら個別で食べられるものを食べて頂く等、その方に合った支援をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に、自立または介助にて口腔ケアを行なっている。夕食後に義歯の消毒も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を確認し、排泄パターンを把握して、トイレ誘導やパッド交換を行なっている。	現在状態の悪い1名を除いて6名が布パンツ、その他の利用者はリハビリパンツである。自立・一部介助・全介助であるが、各利用者の排泄パターンを把握して声掛けし、トイレ誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品を摂って頂いたり、時には腹部マッサージを行う事で、個々に応じた支援を行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は順番に行っている為、職員の都合を優先させて頂いているが、週2回以上は入浴して頂けるように考え、個々人のこだわりを把握し、気持ちよく入浴して頂けるように支援している。	週2回以上、午前中に入浴支援をしている。今年度リフトを導入、約3割の利用者が使用しており、利用者・職員共々楽になった。また、季節の柚子湯や菖蒲湯も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その方の希望や様子を見ながら、声かけや居室への誘導を行なっている。気持ちよく休んで頂けるよう空調にも気を付けている。日中も夜間に影響が出ない程度で休んで頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時、職員間でダブルチェックを行い、入居者が飲み込むまで確認している。変更に関しては看護職員と連携し、状態の変化に対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意な家事への参加や、コロナウイルスの流行前までは、気分転換に外食や買い物にも出かけていた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在はコロナウイルスの流行により外出できない為、車内のみドライブや、ホームでの玄関先で外気浴を楽しまれている。	コロナ禍で以前のような外出支援はできていないが、季節ごとにドライブで車窓から花見をしている。気候の良い時期には玄関先や中庭に出て外気浴をしている。中庭ではプランターでトマトを育て、収穫を楽しんでいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	所持金は事務所で保管しており、必要時に職員と一緒に買い物をしていただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人希望にて職員が代行して電話を掛けることがあり、かかってくることもあった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	気持ちよく過ごせるように清潔に配慮し、季節の壁面や写真等で季節を感じて頂き、居心地よく過ごせるようにしている。	中庭からの採光がとても明るく、対面式のキッチンからリビングの利用者の様子が見え安心感がある。廊下やリビングの壁面には季節毎に利用者が楽しんだ写真入りの貼り絵が飾られ、職員・利用者の熱意と楽しい雰囲気がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳コーナーの活用や席の移動により、楽しく過ごせるように工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していたタンスやテレビなど持参して頂き、自宅のように居心地よく過ごせるように工夫している。また写真や作品などを飾る事で、さみしくならないようにしている。	コロナ禍で、居室の見学はできなかったが、ベッド・エアコン・クローゼット・洗面台が設備されている。その他の家具や調度品は利用者が自宅から使い慣れた物を持ち込み、一人ひとり個性のある空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや風呂に名札をかけて理解して頂く事で、自ら行ける様に支援している。また安全に生活が送れるように、家具の配置や車椅子の配置などに配慮し、安全な環境づくりを心掛けている。		